1

いったんバレンシップに戻り、坑道の探索と、マッキーとキエの救助に使えそうな機材を下ろして、シェンは出立するマエストロを見送った。

飛び立つまで、マエストロは終始、むっつりと口をつぐんだまま動き回っていた。わざとのようにシェンの視線を無視していた。こういうのを「大人げない」という。ジジイの目を盗んでちゃっかりメドックランチヤーを下ろすことができたから、シェンとしてはむしろ有り難いぐらいだった。

一人で発つマエストロを見送るというのは初めての経験だと、機体が見えなくなってしまってから気がついた。この前、マエストロの愛機が最後にタカシの〝場〟へ飛んだ際には、シェンは失神していたからだ。マエストロに叩きのめされたからである。

思い出したら腹が立ってきた。シェンの内側にまったく存在してないとは言い切れないまどろっこしい不安感が、おかげできれいに吹っ飛んだ。

機材を台車に積んでみると、一度では運びきれない。臨時駐機場の広場から二往復することになった。ユキオと二人で大丈夫だからと言っても、ヒロムは僕も手伝うとくっついてきた。

作業が終わるころには、陽は大きく傾いていた。西(と表していいのかどうかはわからないが)の空は淡い茜色に染まり、頭上は薄紫の宵闇のヴェールに覆われていた。

ヒロムがあくびをし始め、足取りがよちよちと頼りなくなってきたので、二往復目の帰り道、シェンは台車をユキオに任せ、ヒロムをおぶってやった。背中のヒロムは意外なほど軽く、ほのかな体温は伝わってくるものの、奇妙に実体感に乏しい。実は、さっき機材を荷下ろししたときもそうだった。重さを体感することができなかったのだ。

背負われている方はどう感じているのか尋ねようとしたら、ヒロムはいつの間にかスヤスヤと寝入っていた。

「眠ってる」

ユキオが思わず足を止めるほどに驚いた。

「ここじゃ疲れたり眠くなったりしないって言ってたよな」

「そうなんだ。僕もキエちゃんもそうだったし……だけど……」

安心したんだろうねと、ユキオは呟く。

「身体は疲れない。だって僕らには身体がないから。だけど気持ちは――意識はある。だから、気持ちが疲れると、それを癒す方便として、身体を使って〝眠る〟という行為を行うんじゃないかな」

ヒロムを起こしてしまわないように気をつけて、シェンはけっこう愉快に笑った。

「どうしたんだい」と、ユキオが訝る。

「いや、あんたしっかりしてるんだね。ちゃんとものを考えられるじゃないか。あのキエって彼女が一緒のときとは大違いだ」

ユキオの顔がうっすら紅潮した。あわてたように眼鏡をずりあげる。坑道での騒ぎのとき、どうやらフレームが歪んでしまったらしく、座りが悪くなっている。

「そ、そうかな？」

「自分でもわかるだろ。実はあんた、あの彼女に攪乱されてたんじゃねぇの？」

狼狽のあまり、ユキオは足を踏み違えて台車の手すりにぶつかった。積み込んだ機材が傾いたので、あわてて手で押さえる。

「ごめん！　これ、大丈夫かな」

一番下にメドックランチャーを載せてある。金属製の細長い筒のような容器だ。

「ちょっとぶつけたり落としたぐらいで壊れるようなもんじゃない。それより眼鏡を落とすなよ」

ユキオは手で鼻筋を押さえた。

「いろいろあるけど……これ、何だい？　何に使うものなのかな」

「あんたは知らなくていいよ」

察しはつくのだろう。ユキオはおそるおそるという口調になった。「武器も混じってるよね？」

「万が一のときのためにな」

「その万が一って、つまりあの、たとえば怪物みたいなものと戦わなくちゃならない局面がくるとか？」

ベルトコンベアを呑み込んだ坑道の奥に現れた、カキモト・モンスターの幻。ちらりと、シェンは思い出した。

「わかんねぇよ。あくまで念のためだ。今まで、あんたたちだけでここにいるとき、怪物にもゲテモノにも襲われなかったろ？」

「集落から動かなかったからね……」

ユキオは目を細め、不安そうな眼差しを、鉱山の方へと投げかけた。ここからだと、森の頭越しに櫓のてっぺんが見えるだけだ。

シェンはまた笑い出してしまった。からかうつもりも悪意もなかったから、とても軽やかな笑い声だったはずだ。

「え？　何？」ユキオがあわててこちらを見る。「何が可笑しいんだい？」

「可笑しくないか？」

ユキオは自殺を試みた。死にたがっていたのだ。

「なのに、今は怪物に襲われることを怖がってる。坑道の奈落に落ちたあの彼女のことを心配してるのだって、考えようによっちゃヘンな話だぞ。いいじゃねぇか、どうせ二人とも死ぬつもりだったんだから、どうなったって」

ユキオは一緒になって笑いたそうだった。現に口元が緩んだ。が、強いてそれを引き締める。

「それとこれとは話が違うよ」と、大真面目に抗弁した。

「そうかなあ」

「ちゃんと死ねるまでは、ちゃんとしてないと」

「ちゃんと二人揃って？」

「――うん」

「あの彼女は違う意見を持ってたようだけど。あんたを置いて、勝手に飛び降りちまった。だけどあんたは、その彼女をちゃんと助けに行こうとしてる」

「君だって」

「俺は仲間を探しに、どっちにしろ坑道に降りるんだから、ついでだ。それに、彼女を放っておいたらこいつが心配するからな」

歩きながらそっと背中を揺すって、ヒロムを示した。小さな頭がかくんと動いた。熟睡している。

ユキオは黙ってしまった。台車がゴトゴトと地面を転がる音が響く。台車の振動に、フレームが歪んだユキオの眼鏡も揺れる。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。